

ビッグバン

それは気配だった

それはことばだった

それは冴え冴えとした意志だった

それはある瞬間のことを予感させる

気配だった

それはあるものをあらしめようとすることばだった

それは冴え冴えとして強い

意志だった

光もなかった

闇もなかった

時間もなかった

空間もなかった

ないものもなかった

その瞬間がどこからきたのか

知らない

その意志がどこから発せられたのか

知らない

その激情がどう生まれたのか

知らない

その光がどう走り始めたのか

知らない

その闇がどう垂れこめたのか

知らない

その時間がどう刻み始めたのか

知らない

その淡い空間がどう漂い始めたのか

知らない

それはある気配だった

どこからきたのか

それはあることばだった

それはある冴え冴えとした意志だった

それらが全てだった

それらが全ての全てだった

永遠について

だれもない縁側にランドセルを
放り出すと

麦笛をびいびい鳴らしながら
ま新しい理科図鑑をかかえて
庭のハシゴをのぼった

のぼり詰めれば二階の屋根ほどの
高さにもなるハシゴの
中段あたりに腰を落とすと
新しいインクの匂いをする図鑑の
色刷りのページを
次々に繰っていった

ミトコンドリア
ゾウリムシ
ミドリムシの鞭毛のキラキラ

主根、側根、気孔の直列
つのとんぼ、はさみむし
おおかみきりの変身

すっかり有頂天になった

ぼくの耳の傍には
屋根を越えて

古生代から根付いてきたという
シダがハタハタ風に靡いていたが

〈地球の命は百億年〉
〈地球の命は百億年〉

という声が
シダがハタハタ鳴るたびに聞こえ
それは

はつきりと

彼らが歌っているのだと知れた

彼らの葉脈が

彼らのハタめきが

〈地球の命は百億年〉

〈地球の命は百億年〉

と歌いながら

ぼくに囁きかける

と、蒼く光り始めたシダの葉たちの

真中あたりにあつて

ぼくはハシゴもろとも

コマとなって回り出した

グルグルと、クルクルと

カラカラと、コロコロと

もの凄いスピードであるのか

おそろしくゆったりした

スピードであるのかわからないまま

カタカタと、キュルキュルと

シュルシュルと、ゴトゴトゴトと

回り始めたのだ

腰を抜かささんばかりのぼくは

思わず必死に手を伸ばし

なにものかを掴もうと

父や母の

名を呼んだ

〈地球の命は百億年〉

〈地球の命は百億年〉

空が斜めになったり

地面が後ろになったり

ハシゴがみしり、みしりと揺れ

なにかの渦巻きの中に放り出され

ぼくは、いっそう

父や母の名をしきりに呼び
なにものかを必死に掴もうと
するのだが

ぼくの指は

新しいインクの匂いのする凶鑑の

ページをしつかりと開いたまま

シダのハタめきが

密やかに

激しい熱情を込めたことばで歌う声を

大音量のスピーカーでも

聞くかのごとく

まるで慎ましやかに

背筋をすつと伸ばした姿勢のままに

ただ聞いているしかなかった

〈地球の命は百億年〉

〈地球の命は百億年〉

これを永遠というのか

これでは永遠とはいえないのか
もう、激しく聞きたくて

父や母の

名をしきりに呼んだ

これを永遠というのか

これでは永遠とはいえないのか

もう、激しく真摯な声を聞きたくて

ぼくは、ハシゴの中段に立ち

頑是なく

麦笛をびいびい鳴らしながら

ミドリムシの鞭毛のキラキラを

うち振りうち叩き

どんどんどどどと揺らし続けた

どこからきたのか

永 遠

永遠の愛

永遠の微笑

永遠の真理

永遠の生命

永遠とは

永遠の友

永遠の美女

永遠の思い出

永遠の誓い

永遠の契り

永遠の旅

永遠の眠り

永遠とは

永遠の闇

永遠の謎

永遠の光

永遠の輝き

永遠の時間

永遠とは

十万回の生死

人は十万回生まれ変わるとい
説がある

三百年おきに十万回生まれ変わる
としたら

三千万年を要する
いや、三千万年しか要しない

十万回生まれ変わる
ということからして不確かな
話であるが

一回きりでしかない
ということにも
頷けないものがある

一回きりでしかないとしたら
どうしてこう

不器用な生き方をしたりするの

生まれてすぐに命を落としたり

疫病にかかったり

誤爆で手足を吹き飛ばされたり

なぜ餓死したりするの

と思えば

七色の籠の中で育てられ

颯爽とパリの街を闊歩し

晩餐会で

優雅にシャンパンを傾けたりする

あるいは

どこからきたのか

野良犬に生まれたり

蝸牛に生まれたり

ペンペン草に生まれたりもする

これはなぜだ

どういう仕組みなのだ

われわれは

いったいどこから来て

どこへ去るのか

なんのために来て

どのように果てるのか

こんなことを考えること自体

そろそろ出口の方が近くなった

せいだとの説もあるが

このことを

生まれたときから考えていた

生まれたときから

いつも同じことばかり考えていた

ひよっとしたら

一刻、一刻に

生死があるのかもしれないと

真剣に考えていたときもあった

結局、十万回という説も

ただ一回きりという説も

そのまま、きつちり正しいのだと思う

今与えられている生の中で

考えられ得る限りの叡智をもって

考察したにしろ

この今の一回の生を

過ぎていかねばならないことは

疑いようもない事実であるのだから

生きているから

何者かに追われ

危機一髪のところまで逃げおおせた
という瞬間に目が醒める

よくあることで

そんなときに限って
たいてい頭が混乱している
だから

また朝の野郎がきやがった
などと悪態をついてしまう

こんな鈍とした朝は

恨みの一つ、二つは言いたいもので
なんで今日は月曜日なんだ
などと当たりちらしてしまふ

講演会で聞いたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生かされてるんだよ」

と心から納得していてさえ

こうなのだ

普通に歩ける

普通に話ができる

普通に食べられる

これがどんなに奇跡的な

ことであるのかわかっていながら

すっぽり

中東や東南アジアの国々の

ことなどが

抜け落ちてしまっている

講演会で聞いたたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生きているから辛いんだよ」

と心から納得し

他にも伝えたりしているのに

こうなのだ

であるのに

「蠟燭の火を消しましょうか」

というサインでも

察知しようものなら

ナンマイダ、ナンマイダを

百万遍でも唱えたりする

手や足の一、二本

へし折ってもらっても構わないから

などという

交換条件を出したりする

あまつさえ

なんとというツキのなさだと

四六時中頭の中は

蒼黒い思いでいっぱいだ

なんとか歩ける

なんとか話ができる

なんとか食べられる

これがどんなに奇跡的な

ことであるのかわかっており

講演会で聞いたたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生きているからいろいろあるんだよ」

と心から納得している

筈であるというのに

朝 日

五月、その強烈なエネルギーが
窓を突き抜けてくる
まだ五時だというのに

金色の、原初の太陽が燃えさかる
そのままの荒々しい混沌の炎の矢が
真っ直ぐに放たれる

太陽は今
壮年期にさしかかったばかりで
なんともやんちゃな暴れん坊だ

勢い余るエネルギーを
持て余し気味に
さあ、これからどんな冒険を
楽しもうかとルンルンだ

五月の朝の窓に炸裂する
光の玉の荒々しさは
彼が四囲に向けて発する雄叫びであり
彼に与えられた激しい生の
燃焼でもある

五月の朝の
全てを燃やし尽くさんばかりの
やけに明るい混沌の炎の色を
指笛を鳴らし、迎え、喝采しよう
太陽よ、大志を抱け
真っ直ぐに、荒々しく、洋々と
愚直そのままに生き抜け

雨

雨はどこから降るのだろう

と目を凝らして見上げていた頃がある

空から、いや雲から、と教わった

空をじっと見上げた

次に、雲を何時間も追いかけた

しかし、何度見ても空も、雲も

雨粒を放っているとは見えなかった

水が途中で溶けて

雨になるのだとも聞いた

となれば、空中に氷を放つ

威勢のよい掛け声が聞こえてきても

よさそうだ

雨はどこから降るのだろう

もの思いに沈んでいるときに降る青い雨

ダンスでもしたくなる気分の甘い雨

雨蛙の合唱につられて降り出す頓馬な雨

赤や黄色のパラソルによく映る雨

谷合いの橋を横切る静かな雨

紫陽花の葉をボトボト揺らす白い雨

雨はどこから降るのだろう

と今も目を凝らして見上げている

十一月

十一月の声を聞くと
いつも安堵する
寒がきつちりしまり
空が高い

なにより十一月は
紅葉の朱
青一色の空を
紅葉が鮮やかな文様で
みずみずしく
華やかに染めあげる
ほどよく色づき
繊細に開いた葉のかたち
枝々が伸び
鈍色の伽藍の屋根が光る

十一月は
薄の群れ
山頂から麓に下れば
あたり一面に銀狐がそよぐ
銀狐が招こうとする
ほんとうに招かれ
峰の反対側に
歩いていったりもする
十一月は
虫の声
古都の礎石に佇めば
千年、二千年
鳴き続けてきた虫たちが
一夜の宴を
繰り広げるために

あちらからこちらから
ひよいと扉を開け

やってくる

それは実に

それは実に妙なる

シンフォニー

十一月は

熟柿の実

葉を落としかけた枝に

二つ、五つ、七つ

熟柿が輝る

実の一つ一つには

陽光がたつぷり潜り込み

とてもぬくぬくと

嬉し気に

楽し気に笑っている

十一月は

古びた農家の縁先

すっかり年老いた猫が

昼寝をしている

蠅が白髪の髭のまわりを

うるさく飛び交つても

大きなあくびを

一つするだけ

たまには

ピクリと前足の爪先を

動かしたりする

十一月は

一番星

そろそろシリウスや

リゲルが顔を見せる

もちろんベガやアルタイルも

健在だから

指さしてみるといい

夜空はほら

星達の賑やかなおしゃべりで

交通整理が必要なほど

賑わっている

十一月になると

なになしに

嬉しくなる

空は高いけれど

とても身近に下りてくるし

柿の葉はまばらになるけれど

もう新芽の支度で忙しい

十一月は

見えないところで

命と命が

せっせせっせと

引き継ぎに忙しい

十一月には

せっせせっせと

なにかが生まれ出ようとする

気配がいっぱい詰まっている

どこからきたのか

記憶

書けないとなると

一字すら書けないものだ

ぼんやりと呆けながら

ときには

銀河系の裏側まで

ぶらぶら

彷徨ったものだ

そこで

二十四歳のとき死んだ俺の

ふやけた目玉を

くるくる回したりした

しかし、俺は

本当は

三百年もとまらない

クシヤミを止めるため

目の前の足の裏をくすぐって

ほしかったのだ

表現

難しいと思えば

これほど難しいものはない

それも、なんのために表現するの
かとなるとやっかいだ

文芸面に限っていえば

表現したいからするのであり

なにをどう表現するの
かと問われると

もう立ち止まってしまふ

そんなことを

表現してよいと思うのか

そんなことが表現であり得るのか

そんな表現が許されていいのか

などと質問攻めにあい

あるいは詰問となり

あるいは完全無視となり

あるいは恫喝となる

表現することとは

単にペーパー上に文字を並べたり

巧みに文字を操ったり

することだけではないだろう

思い、語り、文字にすることで

他の目に止まるようにする

ことには違いないが

思い、語り、文字にするときには

ぼくらを包む天の波動の中に

どこからきたのか

それらを既に

きっかりと放出しているのだ

そう思う

はたして

表現してもよいのか

そんな表現が許されてよいのか

そんな稚拙な表現でよいのか

などという問題は残るが

天に向かつて

己の思いを突き上げ

思いを刻み込むのだから

もう、右や左への遠慮などせず

思い切つてやってみればよい

思い、語り、文字にすることで

天に向かつて

己の思いのたけを

存分に語ってみるがよい

ぼくらがなにを思い

なにに泣き

なにに嬉し涙を流しているのか

存外天は知りたがっているの

かもしれないのだ

タイムカプセル

いつの時に沈められたのか
いつの時に開かれたのか

タイムカプセルに乗り
現れ出た夢を見た
夕べでも夜更けでもない
真昼の夢であった

空気の壁をすりと抜け
ほんの間近の空間から
ひよいと出てきた
ずい分と長く遠い空を
飛んできたという
記憶はあるけれど
ほんの先刻に

ふっと現れたただけだ

なにくれと緻密な長い訓練を
してきたのだったという
記憶もあるけれど
ほんの先刻に
ふって湧いたただけだ

つるつるてんの
白い衣に包まれた
童に似た
女にも似た
かたちをもち
額に刻んだからという
遠いかすかな声を最後に

どこからきたのか

なにも聞こえない
なにも見えない

空気の襞襞をぐるりと
すり抜け

観音開きの
細い隙間をくぐり抜け
ひよっこり出てきた

ここはどこ
ここはいつ
ここはなに

羅針盤

定めない暮らしをしてきた
定めないケンカをしてきた

いきりたっていた

四方に牙を剥いていた

二十四歳で死ぬと決めた

しかし

いざとなると崖っぷちから
引き返した

これが俺

これが俺の履歴書

いつの間にか家族ができた
いつの間にか田舎を捨てた

いつの間にか臆病風になっ
たりつかれた

だがもともと臆病者だった

小さなケンカを売っては

ひたすら逃げた

お前はなにほどの者だと

自分にケチをつけた

俺はなぜこうしていたら

なんだと運命を呪った

ただケチをつけることで

逃げをうった

これが俺

これが俺の履歴書

羊の顔をした狼

狼の爪をもった偽うさぎ

てんでめちやくちやに

仕事に打ち込んだ

打ち込んだ振りをした

好きでもない仕事を

これ見よがしにやってきた

嫌な顔の

嫌な性格の問題野郎

これが俺

これが俺の履歴書

いつの間にか家族ができ

いつの間にか田舎を捨て

いつの間にか小さな砦に

閉じ籠もってしまった

これが俺

これが俺の履歴書

羅針盤というものを

見たことがない

そんなものなど不要だと

片手に握りかけたものを

放り投げたのだったか

いつも酩酊していた

酩酊することで荒んで逃げた

だからこれが俺

だからこれが俺の履歴書

彷徨い流浪い

行方知れず舵を切る

俺の道を俺の道へ

今も今もこの今も

確 率

正しい定義も知らないのに
確率ということを考えている

生まれる確率、出会う確率

その親から生まれる確率

その親になる確率

ただそれだけの問いを発した
だけであるのに

もうこれは、計算の対象では
なくなる

そのほかに、ほんの数点の条件を
加えただけで

頭が爆発しそうになる

こんな他愛もない日常に暮らして
いるというのに

とんでもない確率の

その確率が生み出す

さらにとんでもない確率の中にある

とでもいわないことには

もう始末におえない

ところで、人類が宇宙人に会おう

確率はどんなだろう

宇宙がくしゃみ一つする時間に

遅れただけで

宇宙人はとんでもない時間の

彼方に移動している

はたして一点で交わるとい

どこからきたのか

確率などあり得るのだろうか

それより、人類が存在する時間など
宇宙のモノサシで見れば

どんな微少な単位であるのだろうか

いや、微少であるのか

微少でさええないのか

確率なんかではない

ほかのモノで量るべきなのだろうか

目 眩

鳥インフルエンザの次は
豚インフルエンザだという

空港や街中で
マスクをかけた人を多く見る

防御のためとはいいい
ギョツとするのは否めない

顔が見えない
表情が見えない

サリン事件のときと同じの
防毒マスク姿を思い浮かべる

必定というべきか

異常というべきか

人はこれまで
空気や水はただなのだ
と思ってきた筈だ

水がダメ
空気がダメだとなると

次はなんだと
考えてしまう

復活の日という小説があつた
もの心つくころから

同様の光景を
夢の中で何度も見た

どこからきたのか

これは何だ
これはどういふことだ

マヤやインカの礎石群などは
いったい何を語っているのか

マスクで溢れた街中の
表情のない人の目の色に
会うたびに

激しい目眩に襲われる
これは
いったい何故だろう

インフルエンザ考

ものものしい防毒マスク
に身を包み

航空機の中をチェックする

水際作戦に失敗すると

今度は外国旅行者か

外国人かとくる

今はもう国内感染であろうというのに

懲りずに外国旅行者や

外国人を追跡する

どこの学校のどこの何人が感染と

島国ならではのトップニュースだ

誠に極上サービスこの上ない

この報道によって

犯人に仕立て上げられたり

近所からいわれのない批判や

指弾を受ける人々があることに
はたして思いをいたしたり
することがあるのだろうか

この国の役所に

この国の報道姿勢に

はたして真を感じ得るだろうか

無責任な責任逃れの

バラエティーの延長の

まるで天が降ってくる式の

無軌道ぶりではないか

勿論もう間近に

天が降ってくるに違いない

その真のことの方を

心を空しうして知るべきだ

失っている

失っているものはたいしてない
筈であるのに

確かになにかを失っている

そんな気がする

金でもなければ立場でもない

そんなものはとうに

持ち合わせていないのだから

もつとも、時間でも健康でもない

神や、仏の説を借りれば、

始めもなく終わりもない

ということになるのらしいが

でも、やはりなにかを失っている

そんな気がする

たとえば一本の蠟燭が

静かに燃え退がる

燃え退がった蠟燭の

燃えてしまったあたりの形は

もう失ってしまったのだ

と勘定するのだろうか

蠟燭の一本の形は

どんなに燃え退がろうとも

心のうちにはありありと

そこにあるというのに

始めもなく終わりもない

全ての全てを内包するという

カミヤ、ホトケたち自らは

蠟燭の一本を

どのように燃やすと

いふのだろうか